

第8回国語ワーキンググループの議題

議題 (1)

国語科におけるICT活用等について

議題 (2)

高等学校国語科の現状と課題について

議題
(1)

国語科におけるICT活用等について



1. 教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

(2) 国語科の指導と評価の改善・充実のあり方

- デジタル学習基盤の活用や情報活用能力の育成強化を前提とした、国語科における「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実を図るための方策の具体化

2. 国語科に関する課題を踏まえた固有の検討事項

(2) 学習内容に関する課題を踏まえた検討の方向性

①国語科として育成が求められる資質・能力のあり方

Ⅰ. デジタル・情報社会で氾濫する誤情報に対応できる能力の育成

- デジタル化の負の側面も顕在化する中、多様な情報や意見（生成AIによるものも含む）の中から、正確で信頼できるものや、根拠や論理の展開が妥当なものを見極める力を育成することが重要

(3) その他

- デジタル学習基盤を支える文字入力の扱い

(例)

- 小学校低学年で学習の一部に、キーボードに触れてローマ字で入力してみることを取り入れることを通じた、国語科や他教科等で育む言語能力、情報活用能力の向上



現状と課題

- 論点整理では、「デジタル学習基盤を活用した学習改善は一定程度進んでいるが、地域間・学校間の格差が大きい。学習指導要領の記述が不十分であることがGIGAスクール構想推進上の課題となっている」ことや、「学習者の学習ツールとしての発想に立った記載が学習指導要領にないことが、授業改善の推進にあたっての課題になっている」等、デジタル学習基盤の活用が前提となっていないことが指摘されている。
- 国語科においては、一人一台端末の導入により、文書や発表資料等の作成、情報検索、動画視聴・撮影等で活用する実践が広がっている。一方、深い学びにつながっていない授業も散見される。
- また、ブラウザに生成AIが実装され、検索結果の最上部にAIによる要約が表示される中、その内容を単純にコピー＆ペーストしている実態等も散見される。このような中で、収集する情報の妥当性を確認するとともに、AIに頼って自らの思考を経ない成果物は通用しないような評価の工夫を行うことも喫緊の課題となっている。
- 文字入力指導においては、授業時間外を中心としてアプリ等を活用したローマ字入力の練習を低学年から先取りして行っている学校がある一方で、十分に取組が進んでいない学校も見受けられ、学校間・教師間格差が広がっている。



改善イメージ

1. 基本的な考え方

- 国語科においても、デジタル学習基盤を最大限活用して一人一人の豊かな学びを充実させる視点が重要であり、効果的な活用の一層の推進を図る必要。
- 特に生成AIについては、発達段階を考慮しつつ学習指導要領に示す資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成するかという観点を踏まえた上で効果的な利活用を進めるべき。
- このような考え方の下、文字入力の習得を含む言語能力、情報活用能力の習得・活用・発展に向け、デジタル学習基盤を学習過程に効果的に取り入れる方向で検討してはどうか。

2. 改善の方向性

- 国語科の学習において、誤情報に対応できる文章を読み解く力、物事を批判的に考察する力、根拠や論理の展開が妥当なものを見極める力等は、児童生徒に主体的・対話的で深い学びを充実させるためには重要であり、これらの観点も踏まえた資質・能力の見直しを行うこととしてはどうか。
- その際、AI活用は、発達段階を踏まえつつ、最終的には児童生徒が自ら考え、判断し、成果物の内容を自らの言葉で説明し責任を持つという考え方の下、学習活動を展開するとともに評価の改善を図ることを当面の基本的考え方としてはどうか。

(補足イメージ1参照)

※更なる技術の進展など情報技術の変動性や陳腐化の可能性を踏まえた対応を行う必要があることにも留意

- また、学びに向かう力、人間性等を育む観点からも、自己調整をしながら主体的に学習を進めていくため、端末等の効果的な活用イメージを国語科の学習過程に沿って整理してはどうか。(補足イメージ2参照)
- さらに、デジタル学習基盤を支える「コンピュータで文字を書くこと」の体験について、情報・技術WGでの議論も踏まえ、小学校2年生から書くことの一環としてローマ字入力に慣れる時間を確保することを、内容の取扱いで示してはどうか。(p.13参考資料参照)

※授業の想定としては、端末を使用する際に認証コードを入力したり、「書くこと」の学習の一部で表現する際に、ローマ字入力したりすることが考えられる。

国語科におけるAI活用を含めたデジタル学習基盤を活用した情報活用能力の育成の在り方として、学校段階、他教科等との関係において、次のように整理してはどうか。

国語科でデジタル学習基盤を活用する際の 情報活用能力の育成イメージ

国語科における「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実を図るため、以下のように系統的に指導

【小学校】

〔知識及び技能〕「情報と情報との関係」を中心として指導事項の再整理を図るとともに、「情報の信頼性」を新規事項として位置付け、各教科等の学習に寄与する情報の整理の仕方を指導する。

【中学校】

小学校での学習を踏まえ、〔知識及び技能〕「情報と情報との関係」、「情報の信頼性」を発展的な内容として再整理するとともに、それらを活用して正確で信頼できるものや、根拠や論理の展開が妥当なものを見極めながら思考・判断・表現する力の育成を充実させ、各教科等の学習に寄与する。

【高等学校】

情報を整理し活用する資質・能力について、小・中で身に付けたことを基盤として、実社会で誤情報に対応したり批判的に考察したりすることができる力へと高める。また、生成AIが社会生活に組み込まれている現状を踏まえ、その利便性とリスクの双方を十分に理解した上で、これを有用な道具として適切に活用できる力を育む。

＜AI活用に関する当面の基本的考え方＞

AI活用は、発達段階を踏まえつつ、最終的には児童生徒が自ら考え、判断し、成果物の内容を自らの言葉で説明し責任を持つという考え方の下、学習活動を展開するとともに評価の改善を図る

※更なる技術の進展など情報技術の変動性や陳腐化の可能性を踏まえた対応を行う必要があることにも留意

次の学習指導要領

情報活用能力は核となる教科等において育成されている前提で、各教科等を指導

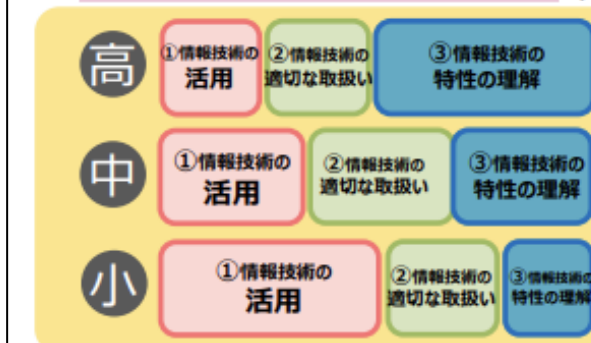


左記の例の場合、コンピュータなどを使った情報収集に関する内容は、小学校総合の情報の領域（仮称）で学ぶこととなり、社会ではこれを学んでいる前提で、調べまとめる学習を行える

その他、小学校算数におけるプログラミング教育などもこれに該当

次の学習指導要領

情報活用能力を体系的に整理し、主として核となる教科等で育成する
(※)ただし、一部教科では当該教科の資質・能力育成の観点から引き続き担うものもある



情報科の内容をさらに充実

情報・技術科（仮称）を創設

総合に情報の領域（仮称）を付加

デジタル学習基盤が学習の前提

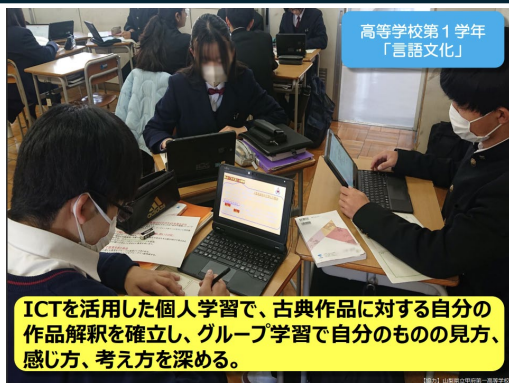
情報活用能力を体系的に整理・構造化し、育成すべき資質・能力を明確に

		理解			表現	
領域		読むこと	話すこと・聞くこと			書くこと
			聞くこと	話し合うこと	話すこと	
学習過程		構造と内容の理解・解釈	構造と内容の理解・解釈	考えの形成	考えの形成	考えの形成
		考えの形成	考えの形成		表現・推敲	表現・推敲

(第4回国語WG資料を一部加工)

「構造と内容の理解・解釈」「考えの形成」「表現・推敲」の学習過程に沿って、生成AI等を含むデジタル学習基盤を人間性を損ねることなく使いこなせるように、デジタル学習基盤を支える文字入力の習得を含む言語能力、情報活用能力の習得・活用・発展に向けて学習過程に効果的に取り入れる。

デジタル学習基盤の環境整備
活用の日常化



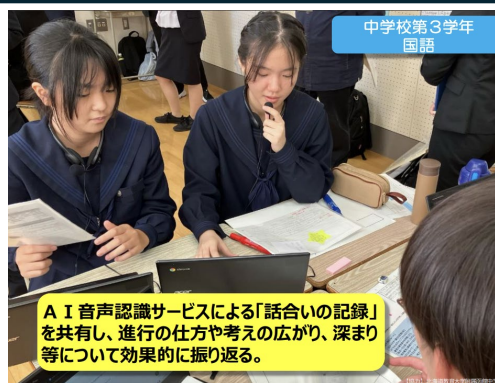
ICTを活用した個人学習で、古典作品に対する自分の作品解釈を確立し、グループ学習で自分のものの見方、感じ方、考え方を深める。

「構造と内容の理解・解釈」

AIチャットボットとのやり取りを参考にし、作品を多角的な視点で捉え、解釈を深めている。

「考えの形成」

解釈についてのAIチャットボットとのやりとりや他者との対話を通して、自分の考えを深めている。



AI音声認識サービスによる「話合いの記録」を共有し、進行の仕方や考えの広がり、深まり等について効果的に振り返る。

「考えの形成」

AI音声認識サービスを活用して実際の話合いから瞬時に生成したテキスト記録を振り返り、自他の話し方・聞き方を分析し、改善点を明確にして再度話し合うことで、合意形成に向けた話合いを行えるようになった。



相手に伝わる話し方のポイントについて集計することで、クラス全体で課題を共有し、共通の課題の克服方法を考える。

「考えの形成」

学習の観点が明確化されたことで、何を意識して発表の練習をすればよいか理解できた。

「表現・推敲」

自分たちの文脈に落とし込み具体的に考えることで発表の見直しが進み、よりよい表現を求められている。

- ・ 情報過多にならないよう、収集した情報に対する吟味・解釈等を通して、適切に扱えるようになること・壁打ちの答えに対する自分の考えの形成（鵜呑みにしないこと）
- ・ 問いをもつことの重要性、人間性の確保（過度な依存）・資料の効果の検討、資料づくり自体が目的化しないこと
- ・ 相互参照等によるプライバシー保護・目的に応じたタイピング入力と手書き文字との使い分けの意識（低学年の文字獲得、字形認識の妨げにならないように留意）

小学校 第4学年 国語

単元名「調べて分かったことを、相手に伝えるように話そう」

※文部科学省webサイトで紹介しているICT活用事例

学習の焦点化

①前時までの練習の様子の動画を振り返ることで、本時に学習すべき視点を獲得させ、見直しをもって学習に取り組めるようにしている。

考えの形成

課題が明確になることで、改善策が見つけれられた。

表現・推敲

③発表内容について深く理解できたことで、「大事なところ」を意識してゆっくり大きく伝えようという練習ができた。

■資質・能力が育成され「深い学び」が実現している子供の姿（7時間目）

【学習活動の場面】

相手に伝える話し方のポイントをまとめたチェックリストに従い、練習の様子の動画を振り返り、上手にできていた項目を一人一人チェックする。その結果をクラス全体で協議し、クラスに共通する課題とその克服方法を見だし、改善につなげていく。

【子供の「深い学び」の姿】

①相手に伝える話し方のポイントをまとめたチェックリストに従い、練習の様子の動画を振り返り、上手にできていた項目を一人一人チェックした。Aは、「**大事なところははっきり大きく**」ができていなかった。

②チェックリストの集計結果をクラス全体で共有し、それぞれの児童が抱えている課題がクラス共通の課題であることを理解し、クラス全体で課題の克服方法を考えた。

A「**自分と同じところがみんなもできていないんだね。**」
T「**クラス全体の課題となっている**“大事なところははっきり大きく”を上手にするには、どのように練習に取り組めばよいですか。」
A「ただ聞き取りやすい声でハキハキと発表するだけでは、**何が伝えたいことなのか**が伝わらないんだね。」
B「**どこが伝えたいのかを考えて**、話し方の工夫をしないとイケないね。」

③このことを意識して発表の練習を行い、その練習の動画を繰り返し見て、改善されているかグループで確認し合った。
A「**伝えたいことは**、アンケート結果の“休み時間に遊んでいる物”だよ。」
B「**だったら一番多いのは**“ボール”だから、発表する前に**間を空けよう。**」
A「アンケート結果の資料を見せる時、間を取った方が、**何の話かなって注目してくれるし**、**伝えたいことが何なのか**、**聞く人にははっきり伝わる**よね。」

【当該指導での「深い学び」】

一人一人の練習の状況を共有したことで、同じ課題を抱えている人が多いことが分かり、**どのように練習に取り組めばよいかについてみんなで考えることができた**。その結果、相手に伝える話し方のポイントは、話す速さや声の大きさといった技術的なことだけではなく、**話す内容に即して工夫することが大事であるということに気付き**、練習に取り組む視点を見だすことができた。

■指導上の工夫とICTの利活用

①チェックリストに沿って、動画を見返すように声かけをする。

*前時の発表の練習を動画で記録しておき、いつでも振り返り、学習成果を確認できるように、端末に保存しておく。

②相手に伝える話し方のポイントについて、**個人ごとの実現状況を集計し可視化することで、クラス共通の課題があることを示し、改善するにはどのように練習すればよいかをクラスみんなで考えられるようにする。**

*個人の振り返りの結果を即時に集計して可視化し、クラス全体で課題を共有することを可能にしている。

③教師は、発表の練習を撮影した動画を見返しているグループをまわり、そのグループで伝えたいことは何かを問いかけ確認する。

*伝えたいことは何かを意識して、チェックリストに沿って動画を振り返ることができるようにしている。

【活用したソフトや機能】
オクリンプラス
(選択肢集計 クラウド活用)



考えの形成

②学級で考えた改善策を自分たちの発表内容に当てはめることで、もう一度発表内容を振り返り、伝えたい大事なところはどこかを考えることができた。

学びの深まりの実感

学習履歴を振り返ることで、本時の学習課題を明確にしている。そのことで、発表をよりよくするためにどう発声したらよいかなど、行為を磨くことで解決を図ろうと考えていた児童が、発表内容を深く考えることが発表するというパフォーマンスをよりよくすることに必要であるということに気付き、全体で考えた改善策を個別具体の文脈に当てはめ、伝えたい大事なところを改めて考えることができた。これらは試行錯誤しながら学習調整を図っている姿であり、「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実が図られている。

デジタル学習基盤で加速する深い学び

※文部科学省Webサイトで紹介しているICT活用事例

<https://www.mext.go.jp/studxstyle/index.html>

考えの形成

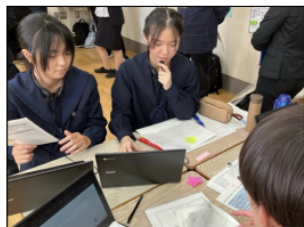
学習の焦点化

■資質・能力が育成され「深い学び」が実現している子供の姿（第3時・第4時）

【学習活動の場面（第3時）】

「持続可能な未来を創るために私たちが取り組むべきこと」に関して、グループごとに「食品ロス削減」「住み続けられるまち作り」「地球温暖化対策」など、具体的な話題を決め、自分たちがどのようなことに取り組むべきかを話し合う。

その後、**話し合いのテキスト記録から「合意形成に向けて進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりできている部分」を見つけ、その役割や効果を考えてコメントとして入力する活動**を行う。



■指導上の工夫とICTの利活用

① AI音声認識サービスを活用することで各自の発言をクラウド上に保存し共有させる。

*発言する際に、1人1台端末に接続したヘッドホンのマイクに向かって話すことで、瞬時に各自の発言を文字化してクラウド上に保存し、共有できるようにする。

② リアルタイムで更新されるテキスト記録を基に、グループごとに必要な指導を行う。

*教師はICT端末上で各グループの話し合いのテキスト記録を閲覧し、必要に応じて論点の整理や進行の仕方などについて指導する。

③ テキスト記録を基に話し合いを振り返らせ、本単元で身に付ける資質・能力を意識させる。

*第1時の冒頭で考えた「合意形成に向けた効果的な話し方・聞き方」の観点に沿って自分たちの話し合いを振り返らせることで、本単元で身に付けるべき資質・能力を意識できるようにする。

＜クラウド上で共有されるテキスト記録の一部＞



＜文書ファイル形式で保存し、コメントを入力したテキスト記録の一部＞

A:これから食品ロスについて話していきます。流れとしては最初に意見を出し合って、方向性を決めてから、実際の取組をまとめていきたいです。

B:自分の意見としては、食品ロスというのはやっぱり身近なことだと思うので、買っ量とか、そういう基本的なことに目を向けて行動の仕方を改善していければいいんじゃないかなって思いました。

C: Bさんに質問で、行動の仕方を改善するっていうのは、具体的に何をやるんですか。

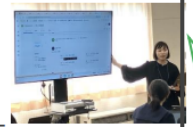
B: はい。調べたんですけど、その食品ロスで食品を捨てるとか、そういうきっかけがやっぱり賞味期限とか消費期限によってしてしまうっていう家庭が多いってわかったので、賞味期限を見てから食品を買うとかいう行動をとっていいのかなって思いました。他にもたくさんあると思います。

C: 別の意見を否定するのではなく、その意見の良い点や改善点をメンバー全員で共有できるように具体的な説明を促す質問をしている。

■資質・能力が育成され「深い学び」が実現している子供の姿（第4時）

【学習活動の場面（第4時）】

話し方・聞き方を工夫していたグループのテキスト記録を基に、「自分とは異なる意見が出たときに、具体的な説明を促すことで、合意できる部分を見いだす」など、**合意形成に向けた効果的な話し方・聞き方のポイントを学級全体で共有し、自分の話し方・聞き方の改善点を明確に意識した上で、第3時の続きを話し合うようにした。**



【子供の「深い学び」の姿】

地球温暖化対策について話し合っていたグループでは、環境負荷の高い肉食の代替となる昆虫食などのメリットを発信する取組として「ポスターを作るとよいと思う」という意見が出された。その直後に、Eが次のような発言をした。

ポスターはどのように作りますか。伝える情報が多いと、読みづらくなってしまいます。どうしたら効果的なポスターになるかについて、具体的に考えませんか。

この発言を受け、他の生徒たちも意見を述べ、「インパクトのあるポスター」と「詳細な情報を載せたポスター」の2枚を作成するという案で合意が形成された。

（Eの振り返りの一部）

前回は、各自が意見を言い、それらに反対するという話し合いになってしまった。しかし今回は、合意形成に向けて効果的な質問の仕方を意識し、対立する意見の背景や、その意見を発言した人の考えを理解しようという姿勢で質問することができた。

【当該指導での「深い学び」】

Eは、第3時の話し合いでは、話し合いの流れを捉えずに発言したり、他の生徒の意見をすぐに否定したりする姿が見られたが、第4時では、他グループのテキスト記録を基に、自分の話し方・聞き方の改善点を明確に意識できるようになった。その結果、**他の生徒の意見をすぐに否定するのではなく、より具体的な考えを引き出した上で、その適否を他の生徒と共に検討する発言が見られるようになった。また、そのように話し合いを進行することによって、話し合いの前は考えていなかった「昆虫食」のメリットや具体的な情報発信の方法などについて、他者の意見とを関連付けながら、グループの合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすることができた。**

【活用したソフトや機能】 MOZICA (AI音声認識サービス)、Googleドキュメント (文書)

■指導上の工夫とICTの利活用

④ 前時の振り返りを基に、合意形成に向けた話し方・聞き方のポイントを意識させる。

*学級全体の学習改善を促すための視点を、前時のテキスト記録を基に具体的に示すことで、自分のグループでの振り返りでは気が付かなかった視点についても意識させ、学習の改善に取り組めるようにする。

⑤ 再度話し合いに取り組みせ、**テキスト記録を基に学びの深まりを実感させる。**

*自分が改善したい点を明確にして話し合わせた上で、教師は各グループの話し合いの状況をテキスト記録で確認しながら必要な支援を行う。話し合い後に、テキスト記録を基に振り返らせ、学びの深まりを実感させる。

次時への足場かけ

学びの深まりの実感

AI音声認識サービスを活用することで、話し合いの過程では話し合うことに集中する一方、話し合いを終えた後には自動的に生成されたテキスト記録を基に自他の話し方・聞き方をじっくりと振り返ることができる。また、その振り返りを、次時の話し合いへの足場として生かし、学習目標を焦点化して再度話し合う場面が設けられており、自らの学習を調整し、学びの深まりが実感できる単元となっている。また、各グループの話し合いの状況は、リアルタイムで更新されるテキスト記録により確認できるため、教師は必要に応じて論点の整理や進行の仕方などについてグループごとに適切な支援を行うこともできる。デジタル学習基盤が主体的・対話的で深い学びを支える環境を整えているといえる。

高等学校 第1学年「言語文化」

単元名「古典作品の解釈をとおして、自らの考えを深める」

※文部科学省webサイトで紹介しているICT活用事例

学習の焦点化

個人学習に入る前に、何を学ぶのかを教師と生徒全員が、必ず共通理解する。AIチャットボットの出力については、あくまで「参考の一つである」「誤りがあることもある」ことを認識して使用するよう指導する。

構造と内容の理解・解釈

グループでの協議が、自分とは異なる視点での解釈を知る貴重な場である事を理解し、自分と異なる解釈や考え方については、質問や議論をすることで自分の考え方をさらに深めることができるようにする。

考えの形成

■資質・能力が育成され「深い学び」が実現している子供の姿（第2、3次）

【学習活動の場面】

自分で立てた学習計画に基づき、調べ学習を行い情報を整理する。グループ学習では、それぞれが得た知見を共有しながら、ものの見方、感じ方、考え方を多面的に深め、作品の解釈を広げていく。

【生徒の「深い学び」の姿】

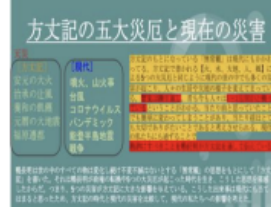
Aは、解釈する作品として『方丈記』を選び、**作品の時代背景や当時の人々の暮らしを調べた。他の作品や絵巻などを参照することで、作品に描かれた社会と現代社会とを重ね合わせて考え、「災害などによって人間の日常は一瞬で崩れてしまうが、それでも人は再生に向かって立ち上がる」という人間の姿を読み取った。**グループ活動では、「作中の自然災害と現代の災害とを比較して考えた」「作品から、現代社会を生きるヒントが得られるのではないか」という意見等が出された。これらを踏まえてAは、「世界は昔も今も**不測の事態によって変化し続けている。本作品は変化を恐れるのではなく、変化に対して柔軟に向き合うことの大切さを教えてくれている**」という考えに至った。

単元の振り返りにおいてグループでは、**古典を単に現代語訳して理解するだけでなく、現代の視点で読み解き、現代の価値観で再解釈することで、新たな意味や価値を見出ししていくことの重要性を確認し合った。**

【当該指導での「深い学び」】

本事例は「言語文化」のまとめと「古典探究」への橋渡しとして位置付けられた単元である。明確な課題設定（ここでは「作品の解釈をもとに、作品と自分とを関係付けて考えを深める」と）と、検索エンジンやAIチャットボットなどのICTの活用により、古典の授業における探究的な学びが実現している。この事例で注目すべきところは、**個人学習とグループ学習を有機的に結びつけ、それぞれの場面でICTが深い学びを支えている点**である。ICTを活用した個人学習では**情報を収集・整理し、自分の問いに基づいた仮説を立てることで、作品を多角的に読み解いている。この過程で得た視点や知見がグループ活動での議論を豊かにし、他者との対話を通じて解釈をさらに深めることができる**。また、ICTを活用した情報の視覚的整理や記録、共有のプロセスにより、生徒は自分に合った学習スタイルを見出し、学習に対する主体性や柔軟な思考力を身に付けている。従来型の古典学習にとどまらず、ICTの利活用によって、**自らの視点で古典を解釈し、自らの考えを深めることにつながっている。**

【活用したソフトや機能】 Googleスライド、Googleスプレッドシート、AIチャットボット



■指導上の工夫とICTの利活用

各自が自分のペース・スタイルで学習を深める。

*自分のペースでの疑問解決や、学びを深めることができる。また、図書館等で資料を調べることに加え、**検索エンジンやAIチャットボットを活用することで、限られた授業時間内で、自分にあった学習スタイルを確立し、主体的な学習を実現**することができる。

個人学習、グループ学習、全体学習の適切な組合せと、個人学習時の支援。

***クラウド内のワークシートや振り返りによって、教師は常に生徒の学習状況を把握し、必要に応じて、問いの投げかけや意見交換を促すなど、適度な支援を行っている。**

毎時間、各生徒の進捗を共有しながら、全体での振り返りを行い、考えが深まったと思うこと、学習が上手に進んでいると思う状況などを共有するなど、生徒が個人学習を振り返り、目標を確認する時間を設ける工夫もなされている。

個別最適な学習が行われている。

次時への足場

学びの深まりの実感

デジタル学習基盤の一つであるAIチャットボットを利用することで、一人一人のペースやスタイルに合わせた学習において、自分に合った思考の深め方が選択できるようになっている。また、クラウド内にワークシート等を共有することで相互参照を可能にするなど、学習を自己調整する環境が整えられている。そのため、生徒一人一人が自立した学習者となっている。また、「参考の一つである」「誤りがあることもある」ことなど、AIチャットボットを利用する時の注意点を事前に確認したうえで活用している点も重要である。

◆自己調整学習のサイクルや、それを促進する要素等に関する研究上の知見

○自己調整学習のサイクル

目標の設定や、効果的に進める工夫（方略）などの計画を行い、興味や自信をもつ

自己の学習状況を把握（メタ認知）しながら方略を工夫して学習を進める

遂行（学習中）

「自己調整学習」
3つのサイクルを自律的に循環させ、学びを深める

学習結果の原因・理由や方略の効果等について振り返り、次の学習につなげる

予見（学習前）

内省（学習後）

(Zimmerman&Schunk(2001))を基に作成

自己調整学習の効果
を高め、学習成果
に繋がりやすくする

○自己調整学習の効果を高める方略の例

参考資料⑧参照

動機づけ方略

質の高い学習を開始・継続することができるよう、自らの動機づけ（モチベーション）や感情を整える方略

学習方略

学習内容をよりよく理解し、定着させることができるよう学習中の情報処理の方法等を工夫する方略

参考資料⑨参照

メタ認知的方略

学習方略がうまく働きよりよい学習成果に結びつくよう、自身の学習過程の計画・把握・調整・振り返り等を適切に行う方略

(Usher&Schunk(2018))を基に作成

子供達の方略
の工夫・発揮を
支える

○方略の指導に関する類型

※研究では、教師による方略の直接的な教授の有効性が示されている

直接的な指導

「～しましょう」等の形で発揮させたい方略を直接的に指導

間接的な指導

「～したいときはどうすればよいか」等の形で、方略を間接的に気づかせる

学習環境設定の工夫

教師による指導は行わず、子供自身が自然と方略を工夫するような学習環境を整える

(Dignath et al. (2022))を基に作成

◆子供が自ら学習を調整しながら学びを進めるための学校現場の実践例 (単元内自由進度学習を含む、自治体や学校の事例等を基に記載)

参考資料⑩参照

単元や題材の設計

- 子供達が意欲的に取り組むことができ、全ての子供が育成したい資質・能力を育むことができるような単元や題材の設計
- 単元全体の目標や内容、流れを子どもと共有することで学習の見通しの明確化
- 個別・協働・一斉といった学習活動の効果的な配置

多様な学習材料の提供
足場かけの準備

- 子どもが自分の力で学ぶことができ、自らにとって学びやすいものを選択できる多様な材料の提供
- 子どもの特性や学習スタイルに応じて選択できる多様な学習材料の提供
- 学習の見通しを持つことや学習の進捗状況の把握、学習の振り返りがしやすい学習材の開発 等

学習環境の整備

- 安心して学習に取り組める空間づくり
- デジタル学習基盤も活用しながら、生徒間や外部との協働を通じた学びの深まりや、生徒自身が学習に必要な情報に必要なタイミングでのアクセスを可能とする 環境づくり 等

令和7年11月10日
 情報・技術WG、生活・総合WG
 合同開催
 資料1 (P. 27)

小学校低学年における情報活用能力育成の現状・課題

- 現行の小学校学習指導要領の総則においては、情報活用能力の育成を図るため、「児童がコンピュータで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得するための学習活動」を各教科等の特質に応じて、計画的に実施するよう規定されている
- 例えば文字入力については、小学校の総合的な学習の時間で基本的な操作の習得について規定されているほか、小学校3年生国語のローマ字の指導と関連が図られるよう配慮することが規定され指導がなされている。しかし、小学校1・2年生でも文字入力を指導している学校もあり、取組に差がある
- 一方で、前述のような一部学習活動を除き、低学年を含む小学校段階において、教科等に情報活用能力の育成に係る明確な位置づけがなく、授業時数や指導内容の具体が示されていないため、全体として地域や学校による差が大きい

検討の前提・方向性

【検討事項・論点（第1回 情報・技術WG資料）】

（2）小学校段階の情報活用能力育成の改善及び教育内容の充実のあり方

- また、「情報の領域（仮称）」につながる、低学年における情報活用能力の向上あり方についても検討してはどうか

【論点・検討の方向性（第2回 情報・技術WG資料）】

小中高校段階を通じた情報活用能力の体系的・抜本的な教育内容の充実のあり方

- 特に小学校低学年に関しては、発達の段階を踏まえ、「③特性の理解」は、「①活用」を通して体験的に初歩的なものを学ぶこととするとともに、「②適切な取扱い」についても同様に「①活用」を通して体験的に学ぶ中で一体的に扱う方向性としてはどうか

- 第二回情報・技術WGにおいて示された「情報活用能力として育成すべき資質・能力を体系的に整理するイメージ」や小学校低学年の方向性を基に情報活用能力育成のあり方を検討する必要
- この際、今回「情報の領域（仮称）」を付加することとなった総合的な学習の時間は第3学年から履修されることを踏まえ、低学年（第1学年、第2学年）で育成すべき情報活用能力がどの教科等と関連付けられるのかという観点に留意する必要がある



具体的な論点・検討の方向性

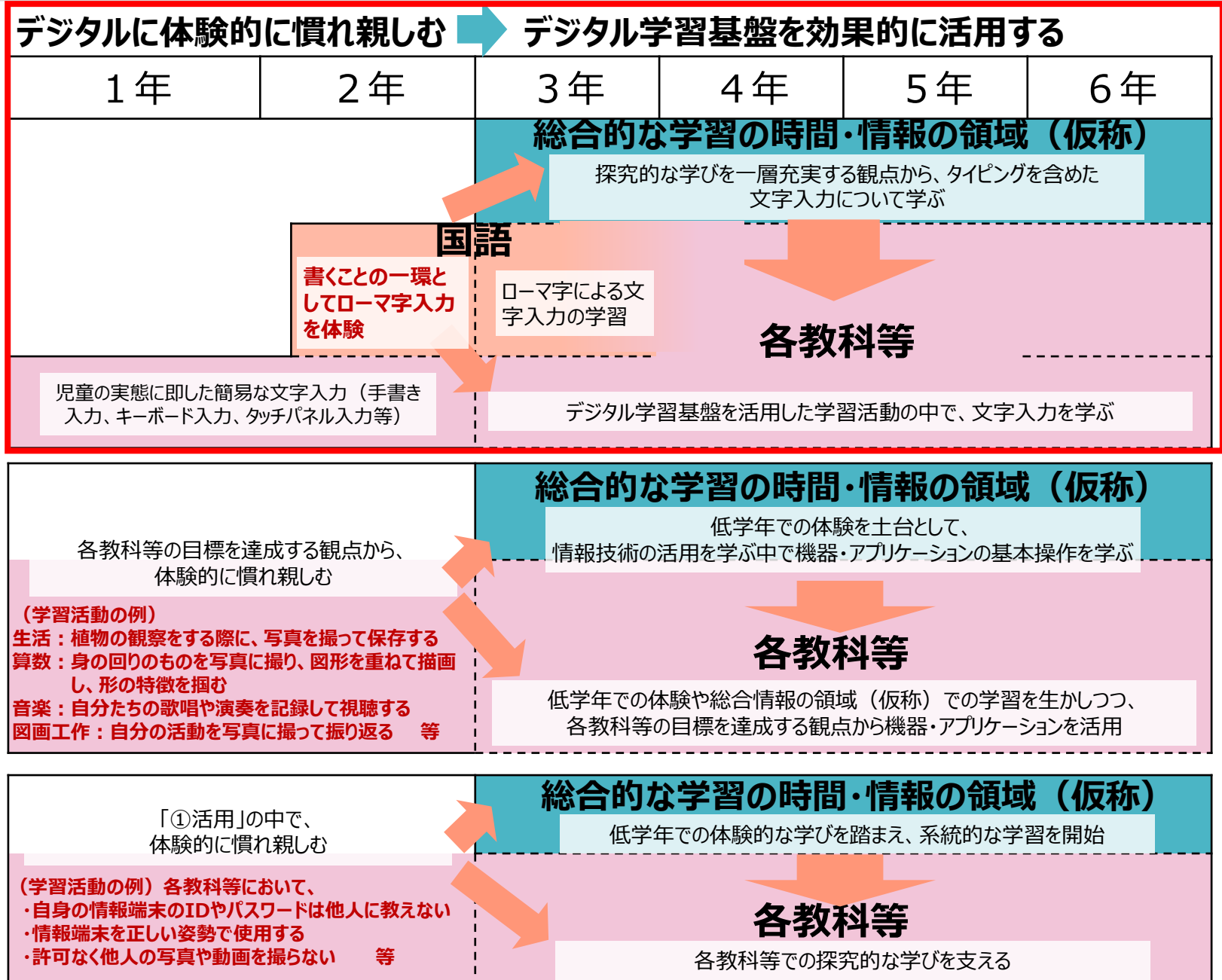
参考資料

令和7年11月10日
情報・技術WG、生活・総合WG
合同開催
資料1 (P. 29)

- タイピングによる文字のキーボード入力については、下記の諸点を踏まえ、例えば、国語科で、ひらがな、カタカナを学んだ後、2年生で文字を書くことの学習の一環として、ローマ字による文字入力を体験することとしてはどうか
 - ✓ 3年生でアルファベット、ローマ字50音、ローマ字入力の全てを学習することの負担感があること
 - ✓ デジタル学習基盤が整備された中、1・2年生で無理なく文字入力を指導している学校もあり、取組に差が生じていること
 - ✓ 文字を書くという国語科としての資質・能力を育む中で、付随的に情報活用能力としても育成することが見込まれること
 - ✓ 情報端末を「書く道具」として自然に扱えるようになり、以降の各教科等でのデジタル学習基盤を活用した学習活動の中で表現や記録の手段として生かしたり、3年生以降の探究的な学びへ円滑につなげたりすることが期待できること（第2学年で文字入力を体験的に行うことの意義等について国語科WGにおいても検討）
 - 「機器・アプリケーションの基本操作」については、低学年においては、特に身体性を大切にしながら、「写真（動画）を撮る」「録音（録画）する」「動画等を視聴する」「絵を描く」「図形を操作し動かす」など、各教科等での目標を達成する観点からデジタルに慣れ親しむ体験的な活動を行う中で学ぶこととし、3年生以降の、総合的な学習の時間に付加される情報の領域（仮称）を中心とする学びに接続することとしてはどうか
- (3) 「②適切な取扱い」「③特性の理解」の学習活動** 【補足イメージ】
- 「基本的な操作」の中で学ぶ「②適切な取扱い」や「③特性の理解」の具体については、例えば、自身の情報端末のIDやパスワードは他人に教えないこと、情報端末を正しい姿勢で使用すること、許可なく他人の写真や動画を撮らないことなどを各教科等における情報端末を使った体験的な学習活動の中で一体的に学んでいくことが考えられる

小学校低学年における情報活用能力の育成イメージ

- 「基本的な操作」について、「コンピュータで文字を書くこと」と、「機器・アプリケーションの基本操作」の2つに整理し、各学年における学習活動と中学年以降への展開は以下のような流れとしてはどうか
- 「②適切な取扱い」と「③特性の理解」は、「基本的な操作」の中で体験的に学ぶこととしてはどうか



議題
(2)

高等学校国語科の現状と課題について

高等学校国語科の科目構成 ～平成21年改訂と平成30年改訂との比較～

【平成21年改訂】

1. 科目構成

必履修科目：

国語総合(4) (A 話すこと・聞くこと／B 書くこと／C 読むこと + 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

選択科目：

国語表現(3)、現代文A(2)、現代文B(4)、古典A(2)、古典B(4) の5科目

2. 改訂趣旨

必履修科目：

● 「国語総合」

・総合的な言語能力を育成する科目として設定され、選択科目や他の科目等の学習の基本、言語活動の充実に資する国語の能力、社会人として必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとした

選択科目：

「国語総合」の各領域の内容を発展させた科目で構成

- 「現代文A」「読むこと」の近代以降の文章の分野と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容を発展
- 「現代文B」近代以降の文章を読むことと、総合的な言語能力の育成の発展
- 「古典A」「古典B」「読むこと」の古典の分野と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容を発展
- 「国語表現」「話すこと・聞くこと」「書くこと」と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容を発展

以上の科目のうち、「A」を付す科目は言語文化の理解を中心とする科目、「B」付す科目は読む能力を中心に育成する科目として科目の性格を明確化した。

【平成30年改訂】（現行）

1. 科目構成

必履修科目：

- ・現代の国語(2)〔知識及び技能〕+〔思考力、判断力、表現力等〕(A 話すこと・聞くこと／B 書くこと／C 読むこと)
- ・言語文化(2)〔知識及び技能〕+〔思考力、判断力、表現力等〕(A 書くこと／B 読むこと)

選択科目：

論理国語(4)、文学国語(4)、国語表現(4)、古典探究(4)の4科目

2. 改訂趣旨

必履修科目：

● 「現代の国語」

・実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力に主眼を置く科目として設定し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導が十分に行われていない」という課題の解決を図る

● 「言語文化」

・上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として設定し、「言語文化への理解を深めるという観点が弱く、学習意欲が高まらない」という課題の解決を図る

以上のように、2科目に分けることで課題の確実な解決を図るとともに、これからの時代に必要とされる資質・能力の確実な育成を目指した。また、それぞれの科目の「読むこと」で扱う教材の文章の種類を明確に示した。

選択科目：

「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える三つの側面の資質・能力の育成と古典を学習対象とした科目で構成

- 「論理国語」「創造的・論理的思考」の側面を育成
- 「文学国語」「感性・情緒」の側面を育成
- 「国語表現」「他者とのコミュニケーション」の側面を育成
- 「古典探究」古典の意義や価値について探究する資質・能力を育成

以上の4科目について、生徒の進路や関心に応じて、専門的・集中的に深く学ぶことを重視し、**全て4単位で設定**

これまでの科目変遷

平成11年3月告示

必履修科目

国語表現 I
(2単位)

社会人として必要とされる基礎的な言語力を育成。
小さい単位数の必履修の設置。

国語総合
(4単位)

※選択必履修
※2領域1事項から3領域1事項へ

選択科目

国語表現 II
(2単位)

近代以降の文章と古典のそれぞれの分野を独立させ、分化的・発展的学習の科目を設置。
柔軟な科目選択を行える単位数。

現代文
(4単位)

古典
(4単位)

古典講読
(2単位)

平成21年3月告示

必履修科目

国語総合
(4単位)

※共通必履修

社会人として必要な国語の能力の基礎を身に付ける。
総合的な言語能力の育成。

選択科目

国語表現
(3単位)

従前の科目を受け継ぎつつ、生徒の多様性に対応。
言語文化についての指導を重視。

現代文A
(2単位)

現代文B
(4単位)

古典A
(2単位)

古典B
(4単位)

現行 (平成30年3月告示)

必履修科目

現代の国語
(2単位)

これからの時代に必要とされる資質・能力を明確にする観点から、高等学校国語科の確実な課題解決を目指して2科目化。

言語文化
(2単位)

※共通必履修

選択科目

論理国語
(4単位)

「思考力、判断力、表現力等」の言葉の働きを捉える三つの要素と、古典に関する科目を設置。
資質・能力を明確にし、専門的な学びを可能とした科目設定。

文学国語
(4単位)

国語表現
(4単位)

古典探究
(4単位)

高等学校国語科における現状と課題、学びの変化

1. 現状と課題

(1) 必履修科目

①現状

- ・ 必履修科目の2科目化により、実社会で必要な国語の知識・技能、言語文化への理解と、それぞれの科目が重視する学びが明確化されたことで、
- ✓ 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導への教師の意識の変化
- ✓ 教材に依存した指導、文学的文章の内容理解偏重の指導、古典文法に偏った指導の改善などに一定の成果があった。

②課題

- ・ 一方で、現行の必履修科目では、各科目の役割や内容が必ずしも十分に整理されているとは言えず、明確化した教材の文章の種類と各科目で育成する資質・能力の関連が十分に意識されにくいという指摘がある。

(2) 選択科目

①現状

- ・ 生徒の進路や関心に応じて、専門的・集中的に深く学ぶことを重視した選択科目にすることにより、それぞれの科目の趣旨に応じた専門的な学びが充実した。

②課題

- ・ 一方で、選択科目がいずれも4単位科目であるため、教育課程編成上の制約から生徒の科目選択の幅が十分に確保できない状況が起こり、選択科目の履修等に偏りが生じている。

2. 高等学校国語科を巡る社会状況を踏まえた学びの変化

(1) 知識の定着と深い理解の実現

- ・ 小・中学校との系統性を踏まえつつ、知識を確実に定着させるとともに、それを運用したり統合したりしながら深い理解へとつなげることが求められている。

(2) 現代社会で求められる言語能力の高度化

- ・ デジタル化・AIの進展、情報環境の高度化により、目的や場面に応じて適切に伝える力や、他者と協働しながら思考を深め合意形成を図る力など、現代社会で求められる言語能力は一層高度化している。

(3) 文理横断的な視点や情緒・感性を育む学びの重要性の高まり

- ・ 文理問わず、人間ならではの情緒・感性を生かしながら、複雑な課題の解決に向けて判断する力がより重要になっている。

(4) コミュニケーション力を育成する学びの不足

- ・ リアルなコミュニケーションの重要性が高まる中、自らの考えを言葉にし、文章・口頭の双方において、論理的かつ説得的に表現・対話する力の育成がより必要となっている。

3. 論点

- ・ 上記1、2に掲げた観点を踏まえつつ、人生を舵取りする力と、民主的で持続可能な社会の創り手育成に向けて、資質・能力をバランスよく育成するとともに、多様な学校や生徒の実態に応じた選択の幅を確保する観点から、今後の高等学校国語科の在り方として、どのような改善を図っていくべきか。

參考資料

現行の高等学校国語科の科目履修状況（推計）

科目	履修率
現代の国語	100%
言語文化	100%
論理国語	77%
文学国語	49%
国語表現	16%
古典探究	87%

教科書の需要数を元に、文部科学省で推計（必履修科目の「現代の国語」「言語文化」の需要数を履修率100%（差があるため平均をとる）として、他科目の履修率を推計）R7年度の値を参照

令和7年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果

		普通科等				専門学科				総合学科
		1年次	2年次	3年次	単位制	1年次	2年次	3年次	単位制	
国語	現代の国語	95.2%	1.2%	0.9%	11.7%	83.7%	16.3%	3.6%	5.2%	100.0%
	言語文化	94.9%	3.0%	1.8%	12.0%	80.1%	21.2%	2.9%	5.2%	100.0%
	論理国語	0.0%	81.4%	85.0%	11.1%	0.0%	42.7%	48.9%	2.9%	83.6%
	文学国語	0.0%	53.8%	56.8%	8.1%	0.0%	30.6%	35.5%	2.0%	69.0%
	国語表現	0.0%	9.0%	23.7%	4.2%	0.3%	9.4%	26.1%	1.0%	49.1%
	古典探究	0.3%	79.3%	77.5%	9.6%	0.0%	22.8%	25.1%	2.0%	69.6%

高等学校国語科における教科目標の変遷

昭和35年改訂(告示) 目標

- 1 生活に必要な国語の能力を高め、言語文化に対する理解を深め、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る。
- 2 経験を広め、知識を求め、教養を高めるために、また、思想や感情を人に伝えるために、目的や場に応じて正しく的確に理解し表現する態度や技能を養う。
- 3 ことばのはたらきを理解させ、国語に関する知識を高め、国語に関する関心や自覚を深めて、国語を尊重し、その発展に寄与する態度や習慣を身につけさせる。

昭和45年改訂(告示) 目標

生活に必要な国語の能力を高め、国語を尊重する態度を育てる。

このため、

- 1 国語よって的確に理解し表現する能力と態度を養う。
- 2 国語による理解と表現を通して、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。
- 3 国語による伝達を効果的にして社会生活を高める能力を伸ばし態度を養う。
- 4 言語文化を享受し創造するための基礎的な能力を伸ばし態度を養う。
- 5 国語に対する認識を深め、言語感覚を豊かにし、国語を愛護してその向上を図る態度を養う。

昭和53年改訂(告示) 目標

国語を的確に理解し適切に表現する能力を身につけさせるとともに、言語文化に対する関心を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成元年改訂(告示) 目標

国語を的確に理解し適切に表現する能力を身に付けさせるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成11年改訂(告示) 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成21年改訂(告示) 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成30年改訂(告示) 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

高等学校国語科における科目構成等の変遷

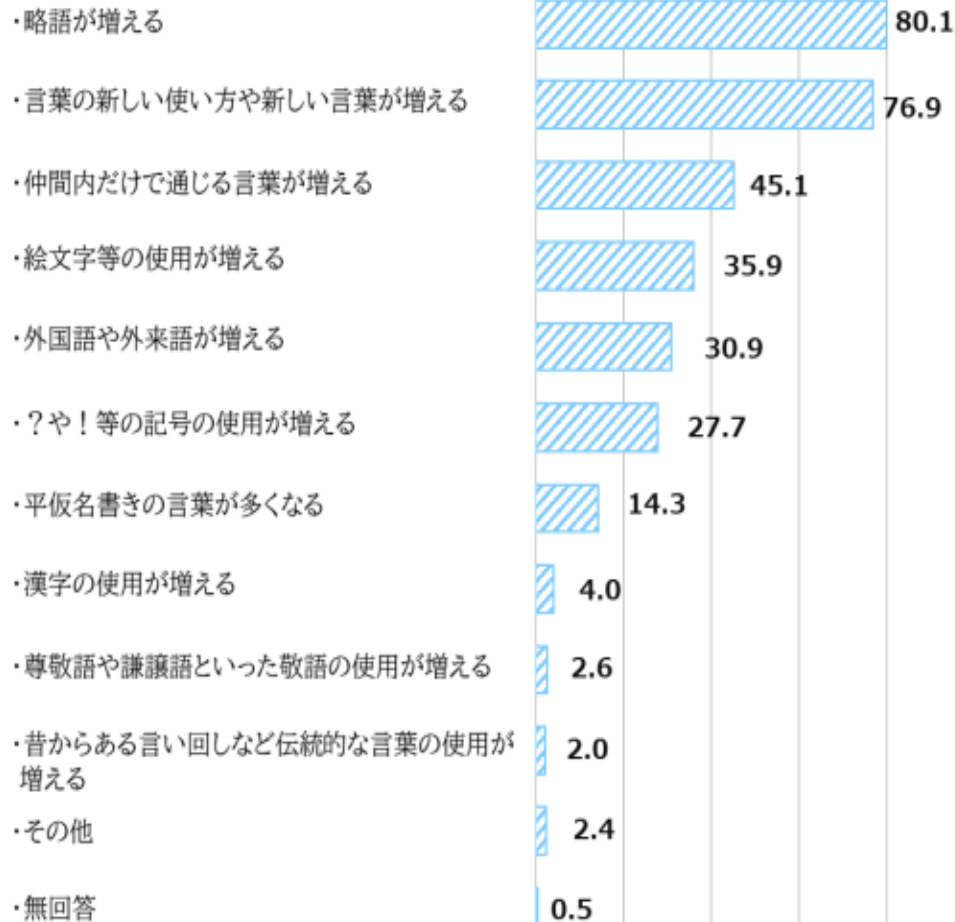
学習指導要領	領域構成	科目（◎：必履修、○：選択必履修）	
昭和35年改訂（告示）	A（聞くこと、話すこと）、（読むこと）、（書くこと） B ことばに関する事項	◎現代国語 ○古典乙Ⅰ	○古典甲 古典乙Ⅱ
昭和45年改訂（告示）	A 聞くこと、話すこと B 読むこと C 書くこと ことばに関する事項	◎現代国語 古典Ⅰ乙	◎古典Ⅰ甲 古典Ⅱ
昭和53年改訂（告示）	A 表現 B 理解 〔言語事項〕	◎国語Ⅰ 国語表現 古典	国語Ⅱ 現代文
平成元年改訂（告示）	A 表現 B 理解 〔言語事項〕	◎国語Ⅰ 国語表現 現代語 古典Ⅱ	国語Ⅱ 現代文 古典Ⅰ 古典講読
平成11年改訂（告示）	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔言語事項〕	○国語表現Ⅰ ○国語総合 古典	国語表現Ⅱ 現代文 古典講読
平成21年改訂（告示）	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	◎国語総合 現代文A 古典A	国語表現 現代文B 古典B
平成30年改訂（告示）	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	◎現代の国語 論理国語 国語表現	◎言語文化 文学国語 古典探究

(文化庁) 令和6年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

＜問3付問1＞SNSの普及が、社会で使われる文字や語句に及ぼす影響（全体）

n=3,125 (%)

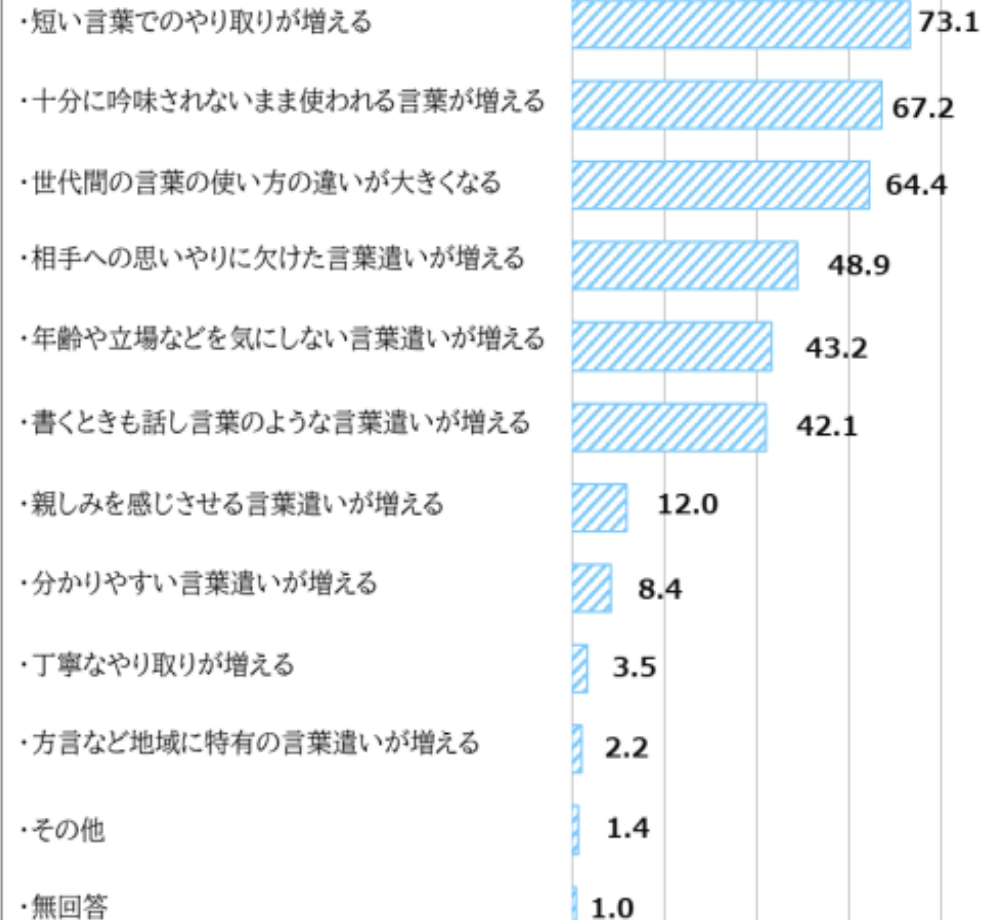
0 20 40 60 80 100

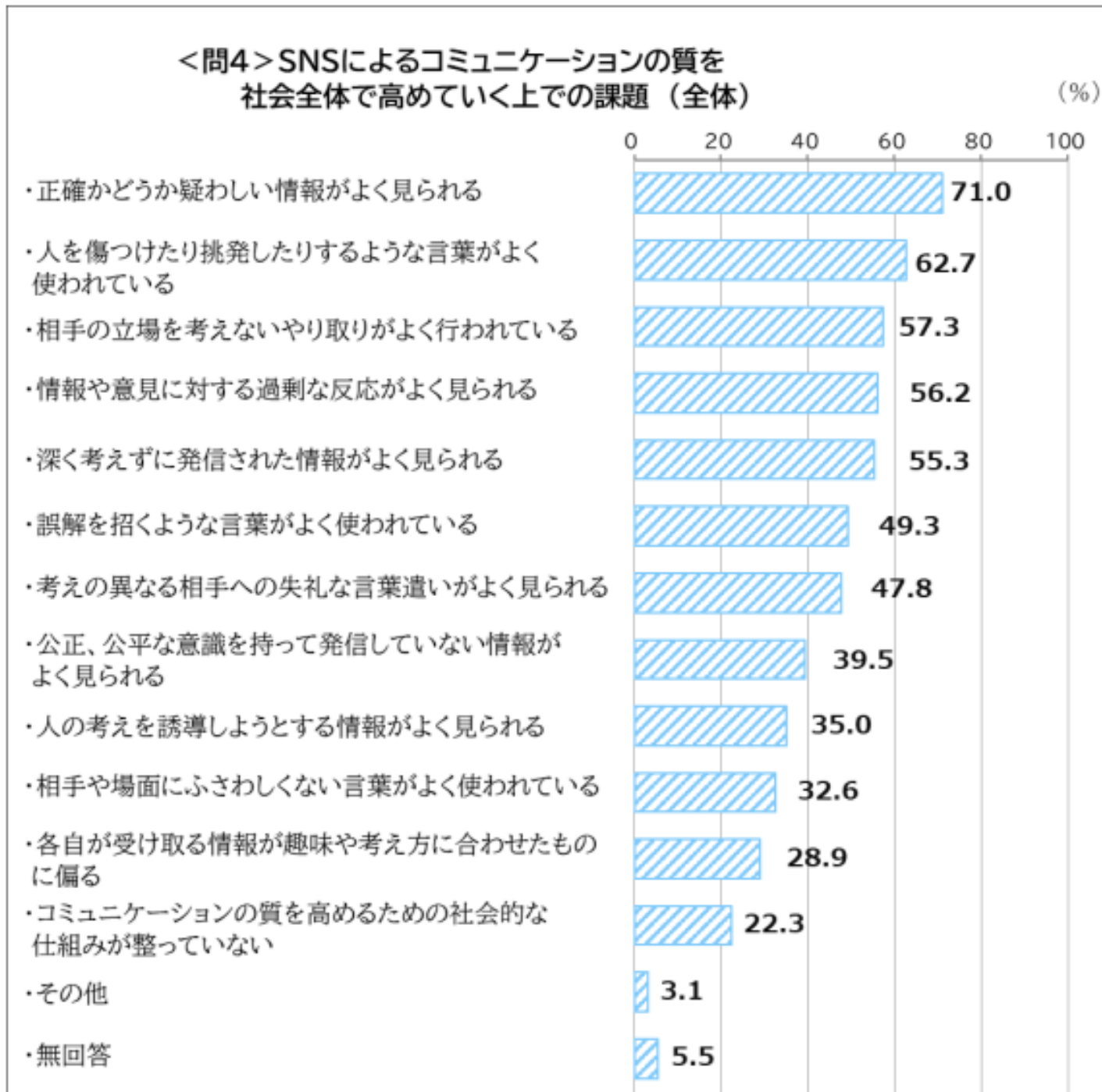


＜問3付問2＞SNSの普及が、社会における言葉の使い方に及ぼす影響（全体）

n=3,125 (%)

0 20 40 60 80 100

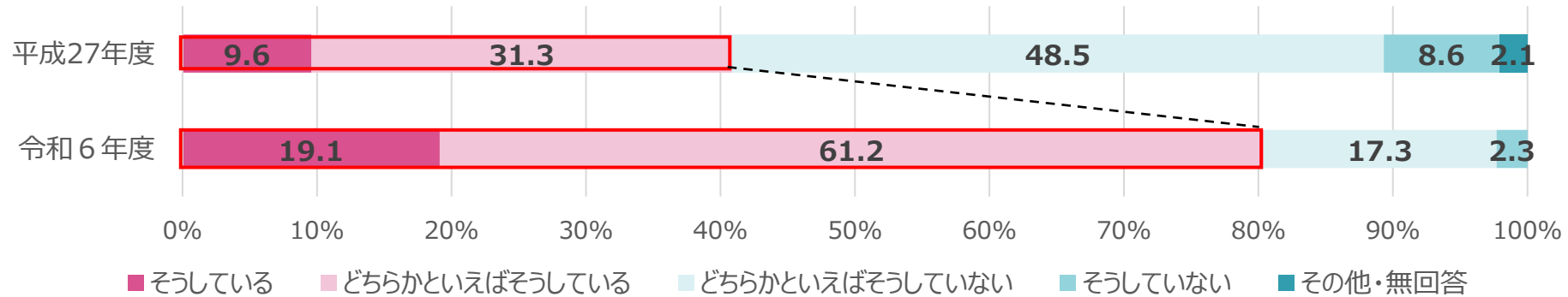






質問項目：

「話すこと・聞くこと」の指導で、発表や討論に向けて、話題について検討して構成や展開を工夫したり、言葉遣いを工夫したりするなど、意図的、計画的な指導を行っている



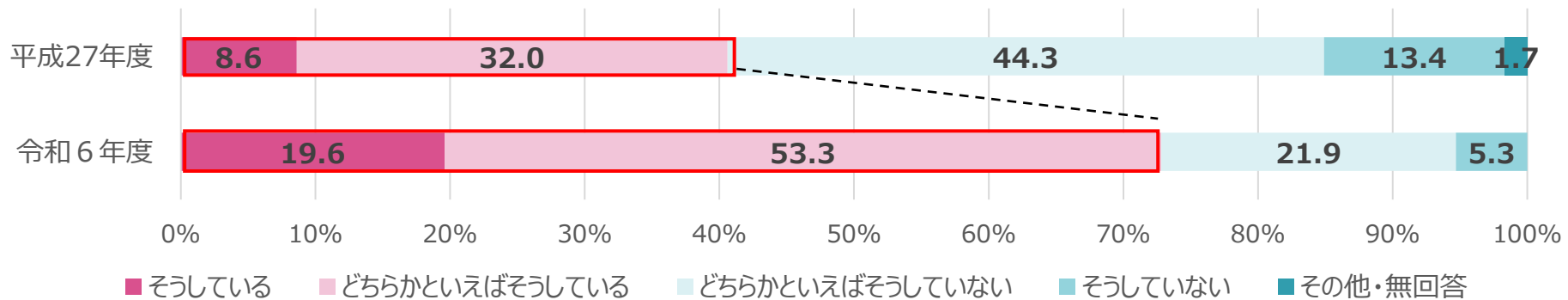
肯定的な回答は**40.9%→80.4%**

⇒「話すこと・聞くこと」の指導に対する高校教師の意識は改善されたと考えられる



質問項目：

「書くこと」の授業で、課題を示して書かせるだけでなく、自ら題材を決めたり、取材したりするための指導の工夫をしている



肯定的な回答は**40.5%→72.9%**

⇒「書くこと」の指導に対する高校教師の意識は改善されたと考えられる

※平成27年度調査は、教師質問紙調査（国語総合）による。令和6年度調査は、教師質問調査（現代の国語）による。

※令和6年度調査結果は速報値であり確定値ではない。

※同趣旨の質問項目を経年比較したものであり、質問項目の文言は多少異なる。（令和6年度調査の質問項目を掲載。）

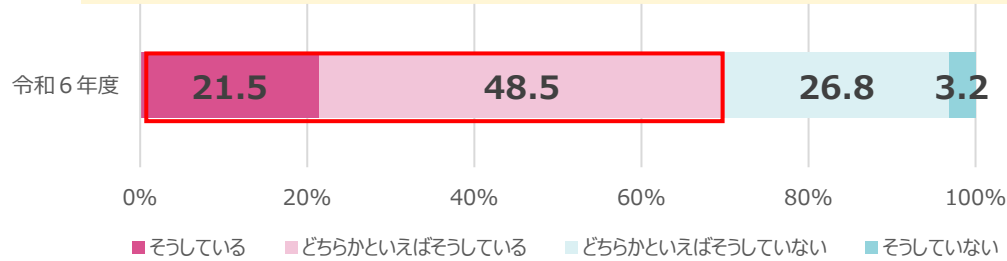
※各回答の数値は、少数第1位までの概数で表示。肯定的な回答を求める際は、少数第2位以下も含めて計算するため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

【教師用】

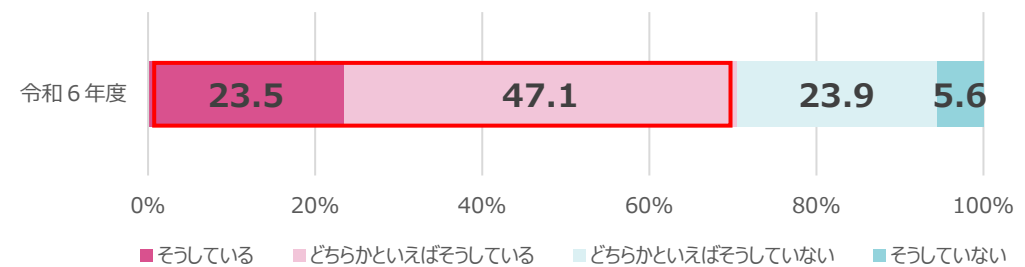
我が国の言語文化への理解を深めるという観点が弱い



質問項目（令和6年度調査）：
「読むこと」の近代以降の文章に関する指導については、我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的文章を活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫している



質問項目（令和6年度調査）：
「読むこと」の古典に関する指導については、古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導している

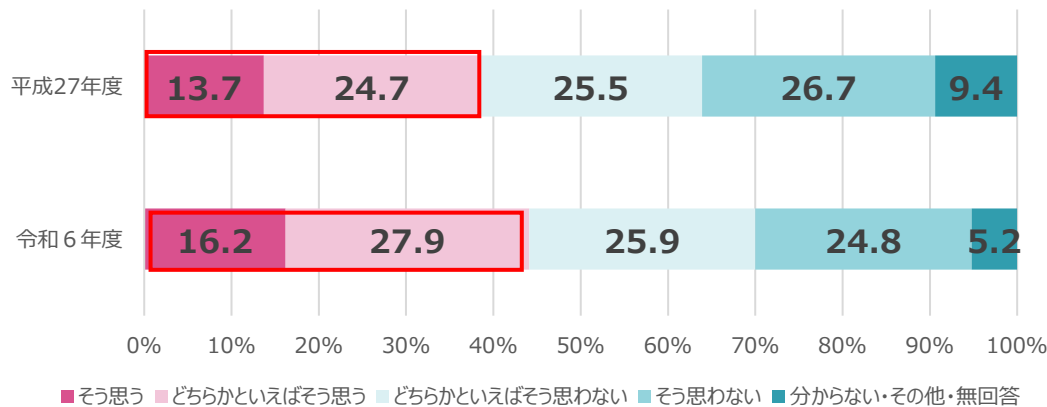


【生徒用】

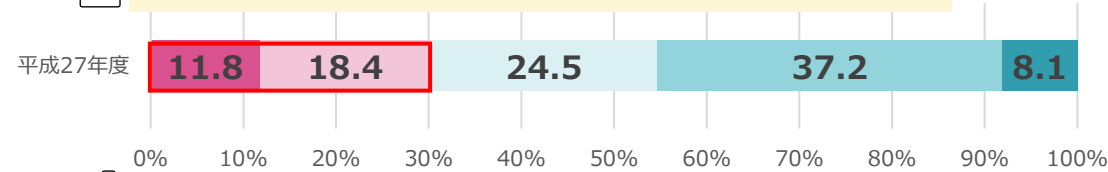
古典への学習意欲が高まらない生徒が多い



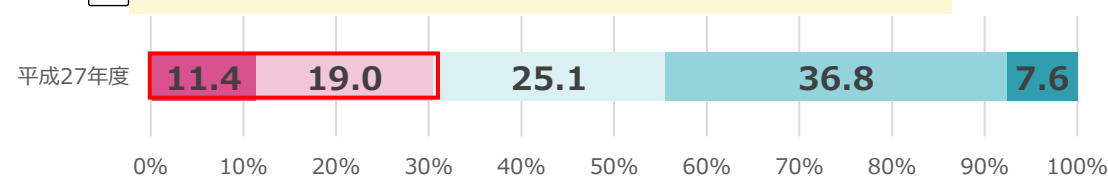
質問項目：古文や漢文の学習は大切だ



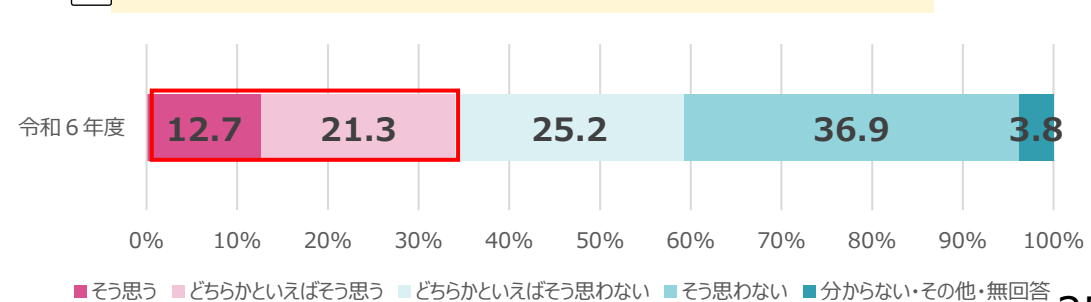
質問項目（平成27年度調査）：古文は好きだ



質問項目（平成27年度調査）：漢文は好きだ



質問項目（令和6年度調査）：古文や漢文は好きだ



※平成27年度調査は、生徒質問紙調査（国語総合）による。令和6年度調査は、生徒質問調査（言語文化）による。

※生徒質問調査は、平成27年度、令和6年度ともに高等学校第3学年（必修科目で実施）を対象としている。

※令和6年度調査結果は速報値であり確定値ではない。

令和6年度 高等学校学習指導要領実施状況調査結果（抜粋）

現代の国語	領域等	出題のねらい	R6調査通過率	
	話すこと・聞くこと	自分の考えが的確に伝わるよう、話しの構成や展開を工夫している。 学習指導要領該当項目 A話すこと・聞くこと (1) イ	37.9%	
		論理の展開を予想しながら聞き、話しの内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価している。 学習指導要領該当項目 A話すこと・聞くこと (1) エ	41.1%	
	書くこと	目的や意図に応じて、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にしている。 学習指導要領該当項目 B書くこと (1) ア	45.1%	
		自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文体、語句などの表現の仕方を工夫している。 学習指導要領該当項目 B書くこと (1) ウ	41.4%	
		目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、自分の文章の課題を捉え直したりしている。 学習指導要領該当項目 B書くこと (1) エ	61.3%	
言語文化	領域等	出題のねらい	H27調査通過率	R6調査通過率
	知識及び技能 (2)	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまり、古典特有の表現などについて理解している。 学習指導要領該当項目 知識及び技能 (2) ウ	91.5%	93.8%
		時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。 学習指導要領該当項目 知識及び技能 (2) エ	48.2%	49.6%
	読むこと	作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。 学習指導要領該当項目 B読むこと (1) エ	38.8%	45.3%
		作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもとうとしている。 学習指導要領該当項目 B読むこと (1) オ	12.8%	35.4%

※令和6年度調査結果は速報値であり確定値ではない。

※令和6年度調査の「言語文化」については、平成27年度調査の「国語総合」との経年変化をみるため、同様の問題を出題している。

現行の高等学校国語科 科目の目標

	科目名	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等
必履修科目	現代の国語	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	言語文化	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
選択科目	論理国語	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	文学国語	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	国語表現	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	古典探究	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。